

[PRESS RELEASE]

2005年3月22日
東京大学医学部附属病院

医学生主導で「ライフサポート(救急救命)ワークショップ」、東大病院が支援

～ 医学臨床実技教育の新技术、シミュレーション教育をフル活用 ～

来る3月26日、27日の両日、東京大学医学部において、医学生主導による救急救命法の実技講習会「学生によるLife support Workshop in 関東」を開催いたします。日本の救急医療システムの充実に向けて、医療従事者のみならず民間人にも出来る救命処置法を含め、広く救急医療の技術を普及させることの重要性を認識する医学生たちが自主的に企画し、東大病院総合研修センターおよび救急部の支援のもと行われる、我が国で初めての試みです。

この実技講習では、日本で初めて、専用に製作されたマネキンやシミュレーターを用いながら、世界最先端の「米国ピッツバーグ・メソッド」をもとに、誰もが、いつでも、安全に、様々な救命処置法のトレーニングを受けられるという、シミュレーション講習を行います。同手法は今後東大病院においても、研修医の指導等において広く採用することが計画され、新たな臨床実技教育のメソッドとして期待されています。

なお、メディア向け見学会は、3月27日(日)14:00～18:00に行います。(詳細末尾参照下さい)

(取材をご希望される方は3月25日(金)までに広報企画部へご連絡ください。)

【背景および現状の課題】

医療従事者にとって、救急蘇生技術をはじめとする、主としてプライマリ・ケアの医療技術の習得は、病院診療および地域医療にとっての安全かつ高質の医療を確保するために、必要不可欠のことと考えられます。しかしながら、医師の卒前・卒後教育あるいはパラメディカル・スタッフに対する教育において、これらの基本的事項ですら、十分に習得できる機会が乏しいというのが現状です。その第一の理由としては、諸技術の習得が、実地臨床の中で行われる、いわゆる On the Job Training(OJT)によっているという点が挙げられます。したがって、十分な技術習得のためには、多くの患者の診療を実際に体験しなければならず、これは医療に関わるもののうち限られたものしか達成できません。また技術を習得してゆく過程においては、その拙劣さゆえに、実際の患者に苦痛を与えてしまうことも少なからず起こりうることです。

こうした問題点を克服するひとつの有力な方法が、高度なシミュレーションシステムを用い、体系的なメソッドのもとに行われるトレーニング(シミュレーション教育、simulation medicine)であり、欧米を中心として急速に世界に広まりつつあります。そして、その先駆となった施設が米国ペンシルバニア州にあるピッツバーグ大学 Peter M. Winter Institute for Simulation, Education and Research (WISER)です。WISER は1994年にその母体となる組織が設立され、以降、全米のみならず欧州その他の地域から広く受講者を集め、医学生、レジデント、看護学生、パラメディック等を対象に、数多くの研修コースを設定して、広く教育を行ってきています。その教育メソッドの特徴としては、1) 精巧な全身シミュレーターの活用、2) 教育記録の電子化による習得度の把握、3) Web の積極的な活用、4) 指導者教育の充実、などが挙げられます。

昨年夏、同施設において、「第1回夏期米国救急医療研修プログラム(主催:ピッツバーグジャパンEMブレホスピタルケアプログラム)」が開催されました。そこで約2週間、日本から参加した18名の医学生らが、心肺停止など呼吸循環器系に緊急状態を来した人々への心肺救命処置法(ACLS)、地震や事故など外傷により緊急状態を来した人々への外傷救命処置法(BTLS)、また頭痛や腹痛や意識障害など内科的疾患により緊急状態を来した人々への内科救命処置法(AMLS)などを学び、全ての資格を日本人としては初めて取得してきました。

このたび、その18名の医学生らを中心に、彼らに賛同する日本の医学生が全国より集まり、学生への初期医療知識の普及、更には民間の方々への初期医療知識の啓蒙・普及をも視野に、関東圏の各医学部の学生代表らに対し、学生自治による学生のためのライフサポート・ワークショップを開催することとなりました。この「学生によるLife support Workshop in 関東」では、ワークショップのクオリティーコントロールのために、ACLS・BTLS・AMLS、シミュレーション教育、民間医学教育の専門家として、ピッツバーグ大学救急医学センターのプログラムディレクターである、トーマス・プラット助教授を招聘します。また、東大病院救急部からも、平生より多くの救急患者の診療にあたり、また東大病院において学生・研修医や、医師・看護師等の職員に救急蘇生術の基本講習を実施している片田正一先生にもご協力をいただきます。

【今後の展望】

シミュレーション教育は、今後の医療安全を見据えた指導のために、きわめて有用と思われ、WISER メソッドが広く普及することにより、医療レベルも確実に向上することが十分期待されます。とりわけ、大学病院のように、多数のスタッフを抱え、また研修医や若手医師、パラメディカル・スタッフの教育を担う組織としては、マス教育のためにもこのような方法を備えておくことは、大変有意義なことです。さらには、受講者を広く募集して、近隣あるいは遠方の医療従事者を指導することにより、ひいては地域医療の貢献という責務を果たすことも可能です。

今後、東大病院においても、安全性と能率性を兼ね備えたシミュレーション教育の手法を、積極的に臨床教育に取り入れてゆくことを計画しており、今回のワークショップのような、次代を担う、熱意あふれる医学生たちの活動に賛同し、支援を行ってゆきたいと考えています。

【イベント概要】

イベント正式名:	学生による Life Support Workshop in 関東
イベント開催日:	2005 年 3 月 26 日・27 日(土曜、日曜) 終日
イベント開催場所:	東京大学本郷キャンパス 医学図書館3F会議室
イベント受講者(医学生):	予定 20 名から 30 名
イベントスタッフ医学生:	60 名 東大、横浜市大、筑波大、東京医科歯科大、帝京大、昭和大、順天堂大、北里大学、群馬大学、千葉大学、慈恵会医科大学、山梨大学、慶應義塾大学、名古屋大学、藤田保健衛生大、三重大、岡山大、岐阜大、名古屋市立大、愛知医科大、島根大

主催:「学生による Life Support Workshop in 関東」

協力:「東京大学部附属病院総合研修センター」「レールダルメディカルジャパン株式会社」「ファイバーテック株式会社」「ピッツバーグジャパン EMプレホスピタルケアプログラム」「日本光電」「東京大学医学部附属病院救急部」

【講師紹介】トーマス・プラット助教授(ピッツバーグ大学救急医学センター)

プラット先生は、ACLS・BTLS・AMLS、パラメディックシステム各々を、ウォルト・ストイ教授(ピッツバーグ大学救急医学センター)、ポール・パリス教授(ピッツバーグ大学救急科)と共に構築された方です。また民間人・救急救命士への初期医療知識教育のツールとしてシミュレーション教育を確立された方でもあります。昨年は、ライフサポート・インストラクターの世界一の称号である、Life Support Instructor of the Yearを受賞されました。プラット先生はピッツバーグジャパンEMプレホスピタルケアプログラムの副ディレクターでもあります。

【関連ホームページ】

心肺蘇生法の父 ピーター・サーファー http://www.safar.pitt.edu/content/archive/history/index_history.html

レールダル父子とピーター・ウィンターの軌跡 <http://www.wiser.pitt.edu/aboutus/dedication.htm>

WISERシミュレーションセンター <http://www.wiser.pitt.edu/>

ピッツバーグ大学救急医学センター <http://www.centerem.com/>



主催代表:

「学生による Life Support Workshop in 関東」

金子仁(筑波大学医学部5年) hkaneko-ns@umin.ac.jp

松本千尋(横浜市立大学部4年)

協力代表:

「東京大学医学部附属病院総合研修センター」

講師 関根信夫